

# 幼 児 の 教 育

昭和七年十二月號

## 飢えと寒さの子等

飢えと寒さが人々を襲ふ季節が來た。痛心にたえない。更に、その不幸の底に多くの子ども達があることを思ふ時、一層の痛みが胸に迫る。誰れかの手に護られない限り、自ら護ることの出来ない子ども達の不辛こそ、世にいたましいものゝ限りであり、殊に、何の不平をいふでもなく、瘦せながら凍えながら、遊び戯れてゐる小さい姿こそ、世に最もいぢらしいものゝ限りである。

暖く着、豊に養はれて、家庭の愛護を一身に占めてゐる子ども達を見る時、薄幸なるおないどしの子等のことが思はれてならない。それも、幸福の子一人に不幸の子幾人の割合を以て數へなければならぬのである。

あゝ又、今日も寒い風が吹く。この子を抱いてやるにつけて、忘れてゐられないのは、あの澤山の子等の薄着と空腹とである。